

「土に埋めると自然に還る」 自社ブランド靴下「ZERO SOCKS」開発

昭和28年(1953)年創業から68年が経つ後藤(正)靴下工場。代表の後藤政弘さん(66)は、先代の父・正幸さんから、専業であるOEM(他社のブランド製品の製造)で靴下づくりを22歳の時に継承した。今回初めて、使い終えた後に土に埋めると自然に還るという自社ブランド「ZERO SOCKS」を開発して立ち上げた。ブラジル製のナイロン繊維の「自然に還る糸」と農薬・化学肥料不使用のオーガニックコットンで、環境にとことんこだわり、人に優しい靴下に仕上がった。近く、現在の3拠点を束ねる新工場が完成、新年1月末頃から「ZERO SOCKS」を本格販売する。

Made
in
奈良

広陵町 後藤(正)靴下工場



代表
後藤 政弘さん

「土に還る靴下」のきっかけは、靴下を生産する最低6工程の過程で、機械の調子の悪い時に出る不良品。「検品して不良品が出ます。それが山となるのを見ると、これなんかかならんかな、いつも思うのです。それは職人の技術であつたりするわけで、いかに少なくするか、というのは僕らの仕事です」と率直に話す。



開発された自社ブランド「ZERO SOCKS」

高校卒業とともに、この世界に入った後藤代表。靴下の機械を覚えるために、機械を製造している会社で1年間修業した。帰ってから半年間は近所の靴下屋に見習いに行き、そこで「靴下とは何ぞや」ということを知った。それから、19歳の時に機械屋で学んだ新しい機械を3台入れた。

後藤代表自身、葛藤との闘いだった。「当然、親父のもとで修業しながら靴下を作っていたので、親父のやり方、僕のやり方、意見が食い違うことが多々あり、よくぶつかりました。ある時、親父から『お前が言うなら、俺はもう一線を引く。やり方については、一切口を出さない』と言われ、プレッシャーの中で意識は芽生えていきました」と振り返る。

染料には廃棄食品を使用

新年から本格販売、町のふるさと納税の返礼品にも

「土に還る靴下」のきっかけは、靴下を生産する最低6工程の過程で、機械の調子の悪い時に出る不良品。「検品して不良品が出ます。それが山となるのを見ると、これなんかかならんかな、いつも思うのです。それは職人の技術であつたりするわけで、いかに少なくするか、というのは僕らの仕事です」と率直に話す。

後藤代表は「本場に柔らかな。それは持った人にしか分からない。足底だけちょっと特殊な編み方で厚くしてあるのです。いろいろ編み方も工夫しながら、このソフトさを残してやればと思います。すごく良いものができるんじゃないかなと思います。この柔らかなさは本場に、店頭であれどこであれ、持っていないと分かりません。今後はいろんな靴下を展開していけたらな、と思っています。

ですが、とっかかりとして何の関係もない人がSDGsに携わることができるということの一つになればいいと僕は思います」と関心を寄せる。

サイズは6サイズ。ベビーが1サイズ、キッズがS、MLの3サイズとレディースとメンズ。ベビーと子どもは1足1500円、レディース・メンズは1足1800円。「高いという印象です。世間一般では靴下は3足1000円のものを買って、ということが圧倒的でしょうから。100%生分解する糸なので、コストが高くなるのです」と話す後藤代表。

クラウドファンディングの決まりで、応援者に商品を送った後でないと本格販売はできない。将来は選肢肢の一つとして通販ももちろんでいる。次男の秀貴さん(32)が柱になり、独自の電子商取引・ECサイトに組み込む。広陵町のふるさと納税返礼品にもなる予定だ。



○創業=昭和28(1953)年
○代表=後藤政弘
○従業員=9人
○事業内容=各種靴下製造・卸販売
○事業所住所=北葛城郡広陵町平尾127-2
○電話番号=0745(55)5555
○ファクス=0745(44)9037



<http://gto-sox.com>



肌に柔らかくて、履いた人にしか分からないくつろぎの時間